

. 活動事例

1. 文化芸術活動

01. とっておきの音楽祭

活動分野	文化芸術	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神	年齢	全年齢
活動地域	宮城県仙台市	実施主体 【任意団体】	名 称:とっておきの音楽祭実行委員会 SENDAI 住 所:宮城県仙台市青葉区本町2 - 9 - 3 第3産伸ビル6F 電 話:022-265-0980 fax:022-716-5717 URL :http://totteokino-ongakusai.jp		

活動概要

とっておきの音楽祭は、障害のある人もない人も一緒に音楽を楽しみ、音楽のチカラで「心のバリアフリー」を目指す音楽祭である。

障害のある人への音楽サポート(演奏指導、共演、障害がある人が作詞したものへの作曲)や、音楽キャラバンによる宮城県内各地でのコンサート開催など、1年を通して活動を行っている。会社員、ミュージシャンなど福祉の専門家でない人たちもボランティアで参加し、「音楽でバリアを打ち壊せ！」という合言葉で「心のバリアフリー」の輪を広げ続けている。

音楽祭では、商店街、ビルの前、公園など街がステージとなり、障害のある人もない人も一緒に演奏し、歌い、踊り、街行く人が観客となる。

<主な活動内容>

- ・とっておきの音楽祭の開催(毎年6月第一日曜日開催)
 - ・とっておきの音楽祭キャラバンの開催
 - ・とっておきの音楽祭ラジオキャラバンの企画・制作
 - ・福祉マップ調査と制作
- など、年間を通して活動している。



活動を始めた背景・経緯

とっておきの音楽祭は、2001年に「第一回全国障害者スポーツ大会 翔く・新世紀みやぎ大会」を盛り上げるために、障害のある人もない人も一緒に音楽を楽しみ、音楽のチカラで「心のバリアフリー」を目指す音楽祭として開始された。

活動目的

とっておきの音楽祭は、音楽という人間の根源に存在する媒体を用い、また、多くの人たちが往来する街中で実施することにより、障害への理解がある人だけでなく、福祉などに興味のない人など、広く一般の人たちに対して障害のある人の表現活動をアピールすることを目的としている。

その活動を知ってもらうことを「はじめの一步」として、障害や福祉への理解を促進し、ひいては「心のバリアフリー」の実現を目指している。

活動の成果又は効果

2001年に開催した第1回目の参加グループ数は133、観客数は約4万5千人であったが年々、その数も増加し続け、今年開催した9回目では、参加グループ数は、226(応募数283)、観客数約21万人に達し、広く県民等にこの音楽祭の「音楽のチカラで心のバリアフリーを目指す」という趣旨が浸透しつつある。

また、街中で実施するバリアフリー音楽祭として全国に広がり、これまで、現地の実行委員会により県内では、東松島市、栗原市、県外では、山形県山形市、秋田県秋田市、福島県会津若松市、福島県南相馬市で実施し、2010年には新たに熊本県熊本市で実施される。この一つ一つの波をネットワーク化し、大きな波にしていきたい。

活動を継続する上で工夫した点

会場は、商店街や公園がステージとなるため、普段障害のある人とは縁のない人たちが自ずと観客となり、自然に障害のある人たちと交流することができる。一方、普段あまり街に出ることが少ない障害のある人たちは、観客として、あるいは演奏者として多くの人たちと自然に交流できる。こうした開放的な屋外でのさりげない交流こそが、お互いの偏見を取り払い理解しあう「心のバリアフリー」につながってきていると思われる。

活動を継続する上での課題

この音楽祭の趣旨は、県内外に浸透しつつあるが、運営団体となる市民ボランティアの実行委員会を永続させるためには、資金の確保が課題となっている。実行委員会の運営費、音楽祭の開催費の大部分は、個人・企業の協賛金、参加費で賄われているが、厳しい状況である。チャリティーコンサートの開催や、カンパボックスの設置、キャラバンの企画・運営など様々な方法でその資金確保に努めているところである。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

- ・音楽以外のアート(絵画等)にも、積極的に力を入れていきたい。
- ・ステージ数・予算の関係で、出演できない人もいるので、商店街・企業等とのタイアップステージを設置するなどし、応募してきた全ての人が音楽祭に出演できるよう努力していきたい。

実施体制

実行委員 59名(内 有給スタッフ1名)

当日ボランティア約300名(一般応募、手話通訳、福祉、MC、音響系専門学校)

共催:NPO法人オハイエ・プロダクツ

協働:定禅寺ストリートジャズフェスティバル、仙台ゴスペルフェスティバル

キーワード

音楽、心のバリアフリー

その他

平成18年度「いきいき青葉区推進協議会表彰」受賞

平成18年度バリアフリー化推進功労者表彰「内閣府特命担当大臣表彰」受賞

第3回日本イベント大賞「大賞」及び「社会貢献部門賞」受賞



02. チャレンジド・ミュージカル

活動分野	文化芸術	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神・発達	年齢	65歳未満
活動地域	市川市を中心とした千葉県	実施主体 [NPO]	名称:NPO 法人 いちかわ市民文化ネットワーク 住所:千葉県市川市東菅野5 - 8 - 21 - 201 電話:047-339-7809 fax:047-339-8-7810 URL :http://www.ichibun.net/		

活動概要

障害のある人もない人も、子どもも大人も、一緒になって楽しむ、オリジナルミュージカル公演で、一文化団体が面白がって始めた活動が、福祉分野に大きく広がって、さまざまな支援ネットワークが築かれていったという典型例である。

2005年より毎年1回の自主公演を継続している。参加者はさまざまな障害のある児童・青年50名、その家族20名、障害のない児童・人30名、学生を中心にしたボランティアサポーター40～50名、芸術指導者・舞台・制作スタッフ(専門家、市民)50名、計200名近くが毎年関わっている。

公演は市川市内で2回公演。2007年からは千葉市でも1公演を開催して、毎回2000名近い観客を動員している。

参加者は毎回公募し、リピーターは半数以上である。参加費は一人10,000円。

毎週日曜日の13～17時を原則に、4ヶ月計20回の稽古を経て舞台リハーサルと本番を迎える。



活動を始めた背景・経緯

2002年以来2年に一度開催している三世代文化交流を目的とした出演者300人による「いちかわ市民ミュージカル公演」を見た観客の中から、「障害のある我が子にも体験させたい」という要求が出たのがきっかけである。独立行政法人福祉医療機構へ助成金を申請してみたところ、OKが出たことが後押しとなった。

「障害のある人の表現活動も面白い」と始めただけで、「障害のある人のために」と特に意識していたわけではない。今でも「面白がる」ことに徹しており、「面白くなくなったらやめよう」とも思っている。しかし、福祉分野の人たちがこぞって面白がってくれて、今や福祉と文化を結ぶ大きな支援体制が広がりつつある。同時に、主催者の意識も向上して、「障害のある人もない人も、当たり前のように芸術文化を楽しめるまちづくり」へとつなげていこうとしている。

活動目的

社会的に孤立しがちな障害のある人やその家族が、地域の人たちと一緒に舞台芸術創造を楽しむことで、達成感と自己肯定感を獲得し、障害があろうとなかろうとみんなが知り合いになって、差別のない、そして市民芸術文化活動を真ん中にした地域づくりを目指す。

障害のある児童・人の持つ芸術性を伸ばすことも大事だが、障害のある児童・人が創造する喜びや達成感と自己肯定感を獲得し、地域で当たり前な文化的な豊かさを享受できるようにすることが一番の目的である。

「面白い活動は、人を街を元気にする」をモットーに、誰もが楽しく、友だちになって、街の大きな話題になるように心がけている。

活動の成果又は効果

・公演について

市川市市民会館ホールでの2回公演には1500名の観客、2007年からは千葉市内でも1公演を追加して県内各地から500名の観客、計2000名が舞台を見に来てくれた。

最初は、テーマを定めずに自己解放を目的にした身体遊びやダンス・歌唱を中心にした舞台構成だったが、最近では演技や台詞にも挑戦して、徐々に本格的なミュージカル公演を目指している。

また、各地への「出張公演」を企画したり、活動記録のDVD映画「ハクナマタタ！」を作製(文科省選定)し全国上映を呼びかけるなどして、全国発信に力を入れている。

・学生サポーターたちの成長

帝京平成大学や東京福祉専門学校などの学生たちがサポーターとして参加してくれている。最初は、障害のある子どもたちと接したことがないため、どう対処したらいいかわからず戸惑っていたが、一年も経つと見違えるように成長する。サポーターの学生たちと子どもたちが、障害の有無の関わらず自然にふれあい楽しみながら練習をしている様は感動的でした。

このような学生サポーターと子どもたちの関係は、先輩から後輩に受け継がれて継続しており、エネルギーに溢れた若い学生たちの参加により、障害のある子どもたちも活発さを増している。

・障害のある子どもの参加の増加と成長

公演を重ねるに従い、障害のある子どもの参加が増えてきている。公演を見て、又は口コミにより障害のある子どもでも出演できることが周知された結果である。

・障害の有無に関わらず全員が楽しむ

練習はハードで、苦勞が多いが、それらを上回る喜び・感動があり、参加継続を望む人が多い。

障害の有無に関わらずみんなが楽しむことができるよう配慮しながら活動を行っている。



活動を継続する上で工夫した点

「障害のある人が健気に頑張っている」姿を見せるのではなく、芸術的力量的向上はもちろん、出演者・サポーター・観客が一体となった達成感と自己肯定感を大切にして、活動を継続している。

また、保育や福祉を学ぶ大学の学生たちと協力・連携し、こうした活動を全国各地に広げるために記録映画の上映運動などを行っている。

活動を継続する上での課題

・サポーターの確保

出演者の安全と集中のためにマンツーマンでサポートする学生や市民サポーターの参加は欠かせないが、サポーターになってくれる学生は苦学生が多く、週末の練習日にアルバイトを優先するため欠席者が多くなってしまふ。現在、学生サポーターには交通費として1日1,000円を支給しているが、これ以上は予算的に無理であり、最大の課題である。

若者たちの活躍は障害のある子どもたちに励ましと勇気を与えてくれる貴重な存在だが、今後は福祉を学ぶ学生ばかりでなく、より広い範囲の若者に参加を呼びかけるとともに、一般市民にも支援の輪を広げていきたい。

・経費の確保

上演経費を含めた参加費は、一回の公演当たり一人10,000円である(稽古1回につき500円)。親子での参加も多いが、親二人子二人の場合40,000円を支払ってもらっている。しかしながら、助成金などを集めても運営は苦しく、会費を引き上げざるを得ない時期にきている。

・稽古場の確保

恒常的な稽古場がない。行政には稽古場の確保をお願いするとともに、自営の稽古場確保が可能かを模索している。

・障害のある児童・人の台詞

障害のある児童・人にとって、歌うこと、踊ることは比較的入りやすいが、台詞が難しい。

ただ、ミュージカルを進歩させるために、また、コミュニケーション力を高めるためにも、ストーリー性の強化と台詞の深化が不可欠なので、この点にはこだわって、本格的なミュージカルを目指していきたい。



・全力を出すこと

障害のない児童・人は、障害のある児童・人に合わせてしまい、力を制限している場面が見られる。障害の有無に関わらず、全員が全力を出すよう心がけている。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

将来目標として、三世代交流の市民芸術文化活動の拠点づくりを目指している。そこに、市民立の舞台芸術学校や人材養成所、更には芸術活動を目的とする福祉作業所や障害のある人の芸術家養成所を組み合わせることで、市民芸術文化活動を真ん中にした新しい地域社会の確立を目指している。

そうした展望の下に、障害のある人もない人もともに暮らしやすい当たり前の文化的なまちづくり活動にこの事業をつなげていきたい。

また、いくつかの大学の協力を得て、この活動を貴重な社会体験、職業体験の場としてプログラム化したいと考えている。



実施体制

事務局: 有給常勤1名、有給非常勤1名、ボランティアスタッフ数名

事業体制: 統括指導者(作・演出 当法人代表理事)1名を中心に、芸術指導と舞台スタッフの各専門家を組織、また当法人理事1名を中心にサポート指導と要員確保体制を敷いている。

後援: 千葉県、市川市、各教育委員会、市川市社会福祉協議会

協力: 市川市PTA連絡協議会、市川市医師会他

作曲・振付・照明・音響は専門家に依頼し、謝金を払っている。

出演者からの要望で、公演後にも月3回の表現ワークショップ教室を開いており、障害のある子どもと家族向けで、1年間実施の予定。

キーワード

舞台芸術、友だちづくり、三世代交流

その他

障害のある児童・人の成長には毎回驚かされるが、親の自己解放感にもつながっていることを強調したい。そして、障害のある児童・人との密な交流を通して、学生サポーターたちを始めとした関わる市民が皆一様に見事な人間的成長を遂げることを特記したい。

「皆で面白い」ことにこだわる何人かの「言い出しっぺ」がいれば、どの町でも生み出せる活動だと考えている。芸術性や規模は後から成長するものである。

是非、どの町でも気軽に取り組んでほしいし、どんな相談にものりたいと考えている。

03. 富山県障害者絵画展開催事業

活動分野	文化芸術	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神	年齢	全年齢
活動地域	富山県	実施主体 【任意団体】	名 称:富山県身体障害者団体協議会 住 所:富山県富山市安住町5番21号 電 話:076-444-0213 fax:076-433-4610		

活動概要

県内在住の障害のある人の芸術作品を募集し、絵画展を開催し、広く県民に障害者芸術を見てもらう機会を設け、障害のある人となない人との交流の機会とする。

- ・作品の応募対象者:県内在住の障害のある人(知的、身体、精神)
- ・取扱作品:絵画、版画、はり絵、グラフィック画、パステル画等
- ・開催中に特別企画として、県内で実績のある障害のある人の作品10点程を展示
- ・2009年で15回目となる絵画展を10月に開催し、会場である高岡市にあるイオンホールには多くの観客が訪れた。



活動を始めた背景・経緯

平成5年の「障害者基本法」の成立に伴い、身体障害のある人、知的障害のある人及び精神障害のある人が参画して行える事業はないか県内3障害団体で検討し、「障害者絵画展」が企画された。平成7年より、毎年1回開催している。

活動目的

- ・絵画等芸術面において、障害を持つ人たちの埋もれた才能を掘り起こし、その豊かな才能を一般社会に周知し、障害のある人自らの生きがいを支持する。
- ・広く県民に障害者文化をアピールし、芸術文化を通して障害のある人となない人との交流の機会とする。



活動の成果又は効果

入場者数:925 名

出展作品:約 100 点

- ・優れた作品が多く、来場者からは毎回好評を得ている。
- ・個人や企業等からの作品の購入希望もあり、絵画を通して障害のある人の社会参加の機会が広がり、また、経済的自立に繋がっている例もある。
- ・芸術作品を通して、障害のない人との交流や、障害者理解にも繋がっている。

活動を継続する上で工夫した点

- ・新聞や報道機関への情報提供を積極的に行い、広く絵画展開催について広報している。
- ・福祉関係施設等においても積極的に広報し、出展する側の良いモチベーションとなるよう広く案内している。

活動を継続する上での課題

- ・実施当初は共同募金からの寄附があり、また、その後も企業からの寄附を開催資金に充てることができているが、将来的には資金面の不足が懸念されており、今後、本事業を継続していく上で、新たなスポンサーや協力団体等を探すことが課題となっている。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

- ・同団体で実施している障害者文化芸術育成事業(1)との協同、作品展以外での作品展示や周知する機会の掘り起こし等、検討中。

- 1 地域文化祭開催事業(県内4圏域にて作品展を開催)
ワークショップ開催事業(写真教室、陶芸教室)



実施体制

身体障害者団体協議会 職員4名

高岡ハンドベルの会(リンベル) ボランティア約 15 名

共催:県民芸術文化祭

後援:富山県、富山県手をつなぐ育成会、富山県精神障害者家族連合会、富山県社会福祉協議会、富山県芸術文化協会

キーワード

絵画、芸術

04. 大カルタ取り大会

活動分野	文化芸術	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神・発達	年齢	全年齢
活動地域	岐阜県岐阜市とその近郊	実施主体 [NPO]	名称:NPO 法人 障害者自立センター つっかいぼう 住所:岐阜県岐阜市早田東町8丁目4-1 パセール長良1F3号 電話:058-215-7374 fax:058-296-5343		

活動概要

大カルタ取りとは、1メートル四方の大きな絵札と車椅子を使用して行う競技である。通常のカルタは絵札を手でタッチして取るが、この競技では床に並べられた絵札を車椅子の車輪で踏んだら取ったことになる。障害のある人もない人も車椅子に乗り、年齢性別、障害の有無に関わりなく、すべての人が一緒に参加できるという特徴がある。

1988年の第1回大会の開催以来、恒例行事として年に1回開催し、岐阜市および近郊の作業所や障害者団体の関係者、大学・高校生を中心に、毎回150名前後の参加がある。

また、この競技で使用するカルタは、福祉や社会問題、障害者問題などをテーマにした独自のカルタを使用している。これらカルタの句は、大会に先立ち作品の公募を行っている。



活動を始めた背景・経緯

1981年の国際障害者年以來、ノーマライゼーションの理念が広まりつつあったが、それでも日常生活の中で障害のある人とない人が一緒に学び、働き、暮らすというには程遠い状況にあった。多くの障害のある人は外出したくても利用できる交通機関や介助してくれる人がなく、施設や家から一步も出ることができない状況にあった。

こうした状況を打開するため、多くの方々の参画を得て、この事業を始めた。

活動目的

障害のある人もない人も車椅子に乗り、同じハンディで競技を楽しみながら交流すると共に、福祉や障害者問題・社会問題等を題材とした自作のカルタを通して、障害のある人への理解と社会参加を推進していく。

活動の成果又は効果

大会当日は多くの人々が出会い、競技その他の催しを通じて楽しく交流している。中には大会終了後も連絡を取り合い、友人やボランティアとして関係を継続しているケースもある。

また、準備段階から他団体の人や学生に実行委員会に加わっていただき、その活動を通じて交流と連帯の輪が広がっている。

活動を継続する上で工夫した点

効率だけを求めるのではなく、実行委員ひとりひとりの声に耳を傾け、できるだけ障害のある人とない人が協同して活動できるよう、準備段階から工夫している。そうすることにより、単に事業を遂行するための機能集団ではなく、一緒にひとつのものをつくりあげていく仲間としての意識が芽生え、皆が安心して活動に参加してもらえるようになった。



活動を継続する上での課題

実行委員会と関わりのある人々を中心に常に一定数の参加があるが、普段関わりのない一般市民からの参加が低調である。いかにして参加者層の拡大を図るかが課題である。また、大会運営に必用な資金と人材はギリギリで行っているため、それらの確保も課題である。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

行事のような単発のイベントではなく、年間を通して継続的に行うものを実施したいと考えている。例えば何かの創作活動や私たちの身の回りにある課題の解決を目指すサークルのようなものをつくり、例会や日々の活動を通していろいろな人が関わりあっていけるようにしたい。

実施体制

実行委員会は岐阜市およびその近郊の作業所や障害者団体のメンバー、高校・大学のボランティアサークルのメンバーなどを中心に、計十数名で構成される。

事務局員1、2名を置き、事業全般の統括を行っている。大会当日は他にボランティアスタッフを集め、総勢40～50名の人員がスタッフとして活動する。

キーワード

車椅子、カルタ、交流